

研究ノート 出典としての『聖なる宮廷』

橋本 能

1. はじめに

十七世紀の劇作品、とくに悲劇は、ギリシア・ローマの神話・歴史に取材したものが多い。そのため、悲劇はギリシア・ラテンの古典をはじめとして多くの出典を持つ。ギリシア・ラテンの作品のほかにも、出典となった作品として、たとえば『アストレ』があり、『狂えるオルランド』などがある。そうした作品の一つにニコラ・コーサンの『聖なる宮廷』がある。ランカスターは、『十七世紀演劇史』の中で次のように述べている⁽¹⁾。

数多くの翻訳が、古代の歴史家を容易に利用できるようにした。一方、この観点から重要な役割を演じたのは、コーサン師の『聖なる宮廷』だった、これは古代の伝説の一覧である。

この書は、トリスタン・レルミットの『マリヤンヌ』の出典として名高い。『マリヤンヌ』の出典として、言うまでもなくフラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』⁽²⁾があるが、『マリヤンヌ』には、『ユダヤ古代誌』になくて、『聖なる宮廷』から取られた設定がある。

『聖なる宮廷』とはどのような作品なのか。書名のみ知られているのが、当然ながら翻訳もないし、内容もいまだ紹介されていない。この研究ノートは、『マリヤンヌ』の出典となった『聖なる宮廷』とはどのような作品なのかという関心から始まった。しかし、調べてみると、『聖なる宮廷』を出典とする悲劇は『マリヤンヌ』ばかりではなかった。ランカスターは、『十七世紀演劇史』で、『聖なる宮廷』を出典とする劇作品を具体的に挙げている。その数は10篇を超えている。レイモン・ポワソン Raymon Poisson の喜劇『あだっばい女たち』*Les Femmes coquettes* (1670年、オテル・ド・ブルゴーニュ座上演)の台詞にも、『聖なる宮廷』の書名が出てくるほど広く知られた作品である。

『聖なる宮廷』は中央大学人文科学研究所に版本が1冊所蔵されているが、奇妙なことにランカスターが出典として挙げた個所が、この版本には見いだせない。これは何故なのか、これが本研究ノート執筆の動機のひとつである。そもそもこの書がいかなるものだったのか、その内容を明らかにしつつ、この点を検討したい。

2. 作者と作品について

作者のニコラ・コーサン Nicolas Caussin は、1538年トロワに生まれた。1607年にイエズス会に入った。10年間ルアン、ラ・フレッシュ、パリで修辞学を教えた。1620年にパリで説教師となり名声を博した。そのため、宰相リシュリューに呼び出されて、1637年にルイ十三世の聴罪司祭になった。熱心さのあまり、キリスト教徒としての責任感から国王にプロテスタントとの和解を勧めた。この働きかけがリシュリューの怒りを買って、1637年にカンペールに追放された。リシュリューの死後、1643年にパリに戻り、著作の出版に専念して、1651年にパリで没した⁽³⁾。

コーサンの著作としてはラテン語の宗教書が多数あるが、ラテン語の悲劇『エルメニジルデウス』*Hermenigildus* (1657年出版) などもある。中でも1624年に出版された『聖なる宮廷』*La Cour Sainte* は少なくとも10版を重ね、各国語に翻訳された。原題の *La Cour Sainte* を『聖なる宮廷』と訳したのは、副題に「偉大な人々のキリスト教教育と聖性によって花開いた宮廷の人々のその実例」*INSTITUTION chrestienne des Grands avec LES EXEMPLES de ceux qui dans les Cours ont fleury en Saincteté* とある。また、序文にも、この書の執筆意図として「宮廷を聖なるものにする大きな手段がある」⁽⁴⁾ とあるからである。

その後、『聖なる宮廷』は1629年に第2巻が出版された。その題名は、副題として「高位聖職者、政治家、騎士、貴婦人」*Le prélat. L'homme d'estat, Le cavalier, La dame* と記されている。さらに1631年に第3巻が出版された。副題は「格言」*Les Maximes* となっている⁽⁶⁾。しかし、詳しくは後述するが、第2巻、第3巻は初めからコーサンの念頭にあったものではないと思われる。これらの版本の構成は、最終的な版本のものとは異なるからである。おそらくは第1巻が好評だったために、増補されたものだろう。次に版本とその構成を見て行こう。

3. 版本と構成について

『聖なる宮廷』は複数の出版社から出版されて、しかも分かっている限りでも何版も重ねている。たとえば、S. Chappolet が1640年に出版した版は10版を重ねている。また、著者の死後も出版は続き、J. Dubray が1664年に出版した版も同じく10版を数える。しかし、現在残っている版本は必ずしも最初に出版された時の構成通りではない。

パリのフランス国立図書館所蔵の版本を出版年代順に列举すると、1624年版、1636年版、1640年版、1641年版、1642年版、1645年版、1653年版(2種類)、1664年版(出版社の違うものが3種類)、1674年版、年代不明の版本がある。中央大学人文科学研究所が所蔵するのは1644年版であるが、この版本はフランス国立図書館に収蔵されていない。また、『フランス十七世紀演劇史』の中でランカスターが1637年版と1657年版を挙げているが、いずれもフランス国立図書館には存在しない。一方、フランス国立図書館に初版の1624年版は存在するが、第2巻の1629年版と第3巻の1631年版は存在しない。以上のことから、このほかにも所在不明の版本は複数あると考えられ

る⁽⁷⁾。

筆者はフランス国立図書館所蔵の版本と中央大学人文科学研究所図書館の版本を閲覧したが、その限りでは大別すると二種類に分かれる。結論を言えば、1624年の初版本（以後、ここではオリジナル版と呼ぶ）と数冊からなる増補改訂版である。

オリジナル版は以下の四点を閲覧できた。

1624年版（第1巻）

1640年版（第2巻、題名からみて1629年に出版されたオリジナル版の第2巻にあたる）

1642年版（1624年版と同じ）

1644年版（中央大学人文科学研究所所蔵、1624年版の第1巻と同じ内容）

その後の増補改訂版は以下の通りである。

1636年版（フランス国立図書館所蔵は第4巻のみ - 以下同様）

1641年版（第3巻のみ）

1645年版（第5巻のみ）

1653年版（出版社の違うもので、全6巻本と第1巻のみの2種類）

1664年版（出版社の違うもので、全6巻本2種類と全2巻本の合計3種類）

1674年版（第5巻のみ）

年代不明の版本（全5巻）

著者の生前は、増補改訂版が出版されても、オリジナル版はそのまま継続して出版されている。恐らくは簡易版または携帯版としての需要があったのだろう。なお、作者の死後、1651年以降にオリジナル版の存在は確認できない。増補改訂版に統一されたのだろうか。一方、現存する増補改訂版は1636年から存在するが、翌年からルイ十三世の教育係になっているから、そうしたことも関係があるのだろうか。まず、オリジナル版と増補改訂版の構成の違いから見ていこう。オリジナル版の第1巻の構成は4書からなり、その内容は次のとおりである。

第1書（Livre 1）身分のある人をキリスト教の完全さに駆り立てなければならぬ根拠について

根拠（raison）は13章に分かれて、その理由を列挙している。

第2書（Livre 2）救済と完全への道で世俗の人々の見出す妨げについて

妨げ（obstacle）は12章に分けて、列挙している。

第3書（Livre 3）美徳の実践について

33章（Section）に分かれて、行いを列挙している。

第4書（Livre 4）諸宮廷の不敬虔について、不幸な政治家

ヘロデ大王の宮廷の成立からその悲惨な末路が語られるが、その中心は妻のマリヤヌと息子のアリストビュルの処刑である。

第5書 (Livre 5) 幸運な敬虔さ

ヘロデの宮廷と対比して、テオドシウス二世の「聖なる」宮廷について物語っている。

第2巻はフランス国立図書館にもないため閲覧できないが、Cioranescuに拠れば、その副題は“Le prélat. L'homme d'etat. Le cavalier. La dame” (高位聖職者、政治家、騎士、貴婦人) となっている⁽⁸⁾。

第3巻も閲覧できなかったが、同じくCioranescuに拠れば、副題がLes Maximes (格言) となっている。

次に現在フランス国立図書館で閲覧できる増補改訂版では、全体を2部構成にしている。

第1部 (Première partie)

第1論 (Première Traité)

(オリジナル版第1巻の「第1書」から「第3書」までをそのまま収録している)

第2論 (Deuxième Traité)

第1の命令 世俗の宮廷に対して聖なる宮廷の格言

第2の命令 俗世の行いに関する格言

第3の命令 聖なる宮廷の格言

三つの「命令」Ordreは通算で20の「格言」Maximeに分かれている。

(1631年に出版された第3巻Les maximesがこれにあたると思われる)

第3論 (Troisième Traité) 情念に対する理性の支配

14の「情念」Passionに分かれていて、「注意」Remarqueが続いて述べられている。第3論はオリジナル版には存在しない。

第2部 (Deuxième partie)

第2部は人物論だか、「君主」Les Monarques、「王妃と貴婦人」Les Reynes et dames、「騎士」Le Cavalier、「政治家」L'homme d'etat、「聖職者」Le Prélatに大別されている。

増補改訂版第2部で取り上げられた人物は次のとおりである。

「君主」論では、ダヴィデ⁽⁹⁾、ソロモン⁽¹⁰⁾、コンスタンティヌス帝⁽¹¹⁾、ユスティニアヌス帝⁽¹²⁾、シャルルマーニュ⁽¹³⁾、聖王ルイ⁽¹⁴⁾。

「王妃と貴婦人」論は、ユデイト⁽¹⁵⁾、エステル⁽¹⁶⁾、マリヤヌ⁽¹⁷⁾、プルケリア⁽¹⁸⁾、クロティルド⁽¹⁹⁾、メアリー・スチュアート⁽²⁰⁾

「騎士」論は、ヨシュア⁽²¹⁾、ユダス・マッカバイオス⁽²²⁾、ゴドフロア・ド・ブイヨン⁽²³⁾、ジョルジュ・カストリオ⁽²⁴⁾、ブシコー⁽²⁵⁾、バヤール⁽²⁶⁾

「政治家」論は、ヨゼフ⁽²⁷⁾、モーゼ⁽²⁸⁾、サムエル⁽²⁹⁾、ダニエル⁽³⁰⁾、ボエティウス⁽³¹⁾、プリュス枢機卿⁽³²⁾

「聖職者」論は、エリア⁽³³⁾、エリシア⁽³⁴⁾、イザヤ⁽³⁵⁾、エレミア⁽³⁶⁾、聖ヨハネ⁽³⁷⁾、聖パウロ⁽³⁸⁾とセネカ⁽³⁹⁾、聖アンブロシウス⁽⁴⁰⁾

オリジナル版の「第4書 諸宮廷の不敬虔について、不幸な政治家」は増補改訂版の「マリヤヌ」
として、「第5書 幸運な敬虔さ」は増補改訂版の「プルケリア」として収録されている。

オリジナル版の1629年出版の第2巻、つまり「高位聖職者、政治家、騎士、貴婦人」は整理統合
されて、増補改訂版の第2部に収録されている。

次に、『聖なる宮廷』とこの書を出典とする劇作品の関係について検討する。

4. 『聖なる宮廷』を出典とする劇作品

ランカスターが挙げている『聖なる宮廷』を出典とする劇作品(14作)は以下の通りである。そ
れぞれの作品について年代順に記す。まずランカスターの記した出典を挙げる。次に、それがオリ
ジナル版と増補改訂版のどのパートに対応するか、「論」または人物名を示す。⁽⁴¹⁾

○ トリスタン・レルミット Tristan l'Hermite の『マリヤヌ』 *La Mariane* (1636年初演) について
は、ランカスターは「『聖なる宮廷』に示唆を受けた」⁽⁴²⁾と書いているが、どの箇所が出典になっ
たかは記していない。マリヤヌについては、オリジナル版でいえば「第四書 諸宮廷の不敬虔に
ついて、不幸な政治家」、増補改訂版では「第二部」の「王妃と貴婦人」の「マリヤヌ」を出典の
一つとする。なお、オリジナル版と増補改訂版の記述は同じで、トリスタン・レルミットがどちら
の版本に拠ったのかは分からない。オリジナル版の記載は、すべてそのまま増補改訂版に収録され
ているからである。

○ ルノー Regnault, 『マリー・スチュアール』 *Marie Stuard, Reyne d'Ecosse* (1637年初演)

ランカスターは『聖なる宮廷』を出典とは言いがたいとしているが、増補版第二部の「王妃と貴
婦人」中に「マリー・スチュアール(メアリー・スチュアート)」があることを付記しておく。

○ グルネル Grenaille の『不幸な無実の人、またはクリスピの死』 *Innocent malheureux ou La Mort
de Chrispe* (1638年初演)

ランカスターには出典の場所の記載は“II, 48”とあり⁽⁴⁴⁾、これは第2巻の48ページを指す(以
下同じ)。オリジナル版にはこの箇所はない。増補改訂版の第2部「君主」の「コンスタンティヌス
帝」に当たる。

○ ラ・カルプルネード La Calprenede の『エロードの子供たちの死』 *La Mort des Enfants d'Herodes*
(1638年初演) の出典は、ランカスターによれば“Ed.1657, II, 184, 186”と“II, 254-71”⁽⁴⁵⁾、これは、
トリスタンの『マリヤヌ』と同じく、オリジナル版「第四書 諸宮廷の不敬虔について、不幸な
政治家」または増補改訂版第二部の「王妃と貴婦人」の「マリヤヌ」に基づく。

○ メレ Mairat 『アテナイス』 *Athenais* (1638年初演)

ランカスターの“II, p.201-12”⁽⁴⁶⁾は、オリジナル版でいえば、第5書 (Livre 5) 「幸運な敬虔さ」、増補改訂版では第二部「君主」の『プルケリア』である。

○ ゲラン・ド・ブルカル Guérin de Bouscal, 『認知されない息子』 *Le Fils désadvoué* (1640年初演)
“II, 449, 453-4”⁽⁴⁷⁾は、増補改訂版第二部「政治家」の『ボエティウス』にあたる。

○ 匿名『テオドーズの嫉妬』 *Jalousie de Theodose* (1643年初演)、

ランカスターの“II, pp.201-12”⁽⁴⁸⁾は、オリジナル版の第5書 (Livre 5) 「幸運な敬虔さ」、増補改訂版では第二部「君主」の『プルケリア』である。

○ ゲラン・ド・ブスカル Guérin de Bouscal の『復位した王子』 *Prince rétably* (1644年初演)

ランカスターの指摘する箇所は1657年版の“I, Traité III, pp.188-9”⁽⁴⁹⁾であるが、これは増補改訂版の第3論 (Troisième Traité) の「情念に対する理性の支配」で、「注意」Remarquesの中の実例だろう。

○ トリスタン・レルミットの『クリスピの死』 *La Mort de Chrispe* (1644年初演) はグルネルと同じ題材であり、“II, pp.38-52”⁽⁵⁰⁾は増補改訂版第二部の「君主」の「コンスタンティヌス帝」である。とすると、この部分はオリジナル版にないから、トリスタン・レルミットもおそらくは増補改訂版を参照していたことになる。

○ モントーバン Montauban の『アンデゴンド』 *Indégonde* (1652年初演)

“II, pp.254-70”⁽⁵¹⁾は、増補改訂版第二部の「王妃と貴婦人」の「マリヤヌ」のエピソードの基づく。

○ 匿名『名高きアマゾン』 *L'illustre Amazone* (1653年初演)

“vol.I, traite III, p.180”⁽⁵²⁾は、ゲラン・ド・ブスカルの『復位した王子』と同じく、増補改訂版の第3論 (Troisième Traité) の「情念に対する理性の支配」に「注意」(Remarques) の実例に基づくと思われる。

○ ジュズユス・マリ *Jusus Mari* の『聖エルメニジルド』 *Saint Hermenigildes* (1660年出版) の地名セヴィリヤは、『聖なる宮廷』の“II, p.355”から引き出されたという⁽⁵³⁾。

○ トマ・コルネイユ Thomas Corneille の『マクシマン』 *Maximin* (1662年初演)

ランカスターは“II, 31-47, ed.of 1637”と記している。これは、内容から判断すると第二部「コンスタンティヌス帝」である。なお、ランカスターに拠れば、トマ・コルネイユは『聖なる宮廷』の歴史的事実をまったく扱っていない。

○ レ・リール・ル・バ Les Isles le Bas の『聖エルメニジルド』 *Saint Herménigilde Le Royal Martyr* (1664年上演) は、ランカスターは「出典はコーサンの『聖なる宮廷』かもしれないが、自由に創作している」⁽⁵⁴⁾としているが、出典の箇所は示していない。

○ コルネイユ Corneille の『ピュルケリ』 *Pulchérie* (1672年上演)

“II, 195-227”⁽⁵⁵⁾は、オリジナル版の「第5書 幸運な敬虔さ」または増補改訂版「第二部 王妃と貴婦人」の『プルケリア』を出典とする。

○ 匿名『アテナイス』 *Athénais* (1682年頃執筆)

“II, 201-12, in the ed. of 1657”⁽⁵⁶⁾ はメレの『アテナイス』と同じ箇所であり、オリジナル版でいえば「第5書 幸運な敬虔さ」、増補改訂版では第二部「君主」の『プルケリア』である。

5. 結びにかえて

この研究ノートは、『聖なる宮廷』がどのような本なのかという素朴な疑問から始まった。全体はイエズス会によるキリスト教の教化を目的としている。前半はその教えと教訓であり、後半は実在の人物をモデルとした実例集ともいべきものだった。

『聖なる宮廷』にはオリジナル版と増補改訂版があることは既に述べた。ランカスターが参照した版本はいずれも、オリジナル版ではなくて、増補改訂版であろう。

『聖なる宮廷』を参照した劇作家がオリジナル版を基にしたのか、増補改訂版に基づいたのかは不明な場合もある。たとえば、トリスタン・レルミットの『マリヤンヌ』の出典となった箇所は、オリジナル版にも増補改訂版にもある。一方、トリスタン・レルミットの『クリスプの死』の出典となった箇所は、増補改訂版のみである。どちらの作品を執筆するときも、同じ版本、すなわち増補改訂版を参照したと考えたほうが自然だろう。

ランカスターは、出典として『聖なる宮廷』の1637年版と1657年版の2種類の版本を挙げている。この二種類の版本は参照できなかったが、いずれも増補改訂版と考えられる。なぜなら、両者とも指摘する巻数と頁数がほぼ同じだからである。

ランカスターの参照した版本はいずれも、フランス国立図書館にはない。今後、便宜の点から、出典を調べるに当たって、増補改訂版には、オリジナル版がそのまま収録されているから、フランス国立図書館所蔵の増補改訂版で出典の箇所を指摘するほうがより実際のだろう。出典と劇作品の関係についてのさらに詳細な分析が必要であるが、今後の検討にゆだねたい。

注

- (1) H.C.Lancaster, *A history of french dramatic literature in the seventeenth century*, Gordian Press, 1966, Part 2, volume 2, p.766.
- (2) 秦剛平訳、筑摩書房、ちくま学芸文庫、全6巻、1999年
- (3) 以上の記述は、*Catholicisme*, II, Letouzey et Ané, 1949.に拠る。
- (4) Nicolas Caussin, *La Court sainte*, 1644. p. 3.
- (5) *La Cour Sainte*. Tome second. Le prélat. L'homme d'estat. Le cavalier. La dame. Quatriemes édition, 1629.
- (6) *La Cour Sainte*. Tome III. Les maximes, 1631.
- (7) フランス国立図書館所蔵版も何巻揃えの内の1巻が複数あり、全巻揃っているものは少ない。
- (8) Alexandre Cioranescu, *Bibliographie de la littérature française du dix-septième siècle*, Centre national

de la recherche scientifique, 1969, tome I, p.527.

- (9) David、前10世紀のイスラエル第2代目の王
- (10) Solomon (前971頃-32頃) イスラエルの王
- (11) Constantin (274頃-337) ローマ皇帝、キリスト教を公認した。
- (12) Justinien (485-565) 東ローマ皇帝、聖ソフィア教会を建立、東方教会の信仰に従って宗教政策を遂行した。
- (13) Charlemagne (=Charles Ier le Grand) (742 ou 747-814) フランク国王シャルルマーニュ, カール [カルル] 大帝
- (14) Saint Louis (1214-1270) 聖王ルイ、ルイ9世
- (15) Judithe 旧約聖書中の女性。策略を用いて、敵将ホロフェルネスの首を切った。
- (16) Ester ペルシア王アハシュエロスの妃。宰相ハマンのユダヤ人殺戮の計画を阻止した。
- (17) Mariamne ユダヤ人の王ヘロデスの妻、ヘロデスによって処刑された。
- (18) Aelia Pulcheria Augusta (399-453) ローマ皇帝テオドシウスの姉で、その後見役を務めた。
- (19) Clotilde (375頃-545) フランス王クローヴィス一世の妻、夫をキリスト教に改宗させて、多くの修道院や教会を建立した。
- (20) Marie Stuard (1542 - 1587) スコットランド女王。熱心なカトリック教徒で、プロテスタントを弾圧したが、退位させられた。エリザベス女王暗殺陰謀事件に関与したとして処刑された。
- (21) Josué 旧約聖書中のイスラエルの指導者。
- (22) Judas Machabee ユダヤの愛国者で、しばしばシリア軍を破り、ユダヤ教を再興した。
- (23) Godefroy de Bouillon (1060頃-1100) 第1回十字軍に加わり、エルサレムを落としておうとなった。
- (24) George Kastrioti Skanderbeg (1405-1468) アルバニアの貴族、オスマン・トルコとの戦争に従軍。
- (25) Jean le Meingre Boucicaut (1366-1421) 百年戦争に従軍した軍人。
- (26) Bayard (1476-1524) フランスの軍人、イタリア戦争に従軍して戦功をあげた。
- (27) Joseph、エルサレムの有力者。ピラトに乞うてイエスの屍を葬った。
- (28) Moÿse ユダヤの大立法者、シナイ山で十戒を授かったといわれる。
- (29) Samuel 旧約聖書中のイスラエル最初の預言者
- (30) Daniel 前6世紀始めのユダヤの預言者
- (31) Boece (Boetius) (480-524) イタリアの哲学者で政治家。
- (32) Le Cardinal Plus 不詳
- (33) Elic 前9世紀のイスラエルの預言者
- (34) Elisée 旧約聖書中の9世紀の預言者、エリアの弟子
- (35) Isaye 前8世紀のユダヤ王国の預言者
- (36) Jérémie 前7世紀のイスラエルの預言者

- (37) S. Jean Baptiste 洗礼者ヨハネ、パレスチナの預言者。
- (38) Paulos 初期キリスト教の伝道者
- (39) Sénèque (前5-後65) ローマの詩人、哲学者
- (40) Ambrose (333頃-397) ミラノの司教
- (41) ページ数は記さないのは、参照する版本によって出典となった部分のページ数が異なるからである。
- (42) *Op.cit.*, Part 2, volume 1, p.50.
- (43) *Op.cit.*, part 2, volume 1, p.184.
- (44) *Ibid.*, part 2, volume 1, p.191.
- (45) *Ibid.*, part 2, volume 1, p.188, pp.354-5.
- (46) *Ibid.*, part 2, volume 1, p.227.
- (47) *Ibid.*, part 2, volume 2, p.401.
- (48) *Ibid.*, part 2, volume 2, p.620.
- (49) *Ibid.*, part 2, volume 2, p.634.
- (50) *Ibid.*, part 2, volume 2, p.568.
- (51) *Ibid.*, part 3, volume 1, p.174.
- (52) *Ibid.*, part 3, volume 1, p.182.
- (53) *Ibid.*, part 3, volume 1, p.417.
- (54) *Ibid.*, part 3, volume 1, p.396.
- (55) *Ibid.*, part 3, volume 2, p.579.
- (56) *Ibid.*, part 4, volume 1, p.239.